

第二回 意動用法を使いこなしましょう

河合塾漢文科講師 藤川 左近



1. 教えきれないでしょう

教科書教材の定番である『桃花源記』に「漁人甚異之」（漁師はそのことをとてもおかしいと思った）とあります。おそらく高校ではこの「異」について、「異とす」と読んで「おかしいと思う」あるいは「すばらしいと思う」の意味を表すのだ、と説明するかと思います。これはまあ用例も多く、また重要な意味を持っていますから、私もこのように教えます。

しかしこれとよく似た表現は漢文で少なからず見受けられるものです。試みに、高校古典の教科書（古典B）から拾い上げてみると、こんなにあります。

〔例1〕
甘^{シトシ}其^シ食^ヲ、美^{トス}其^シ服^ヲ。

〔老子〕章八十（小国寡民）
（食事を美味しいと思ひ、衣服を素晴らしいと思ふ）
衆聞^{カバチ}則^{トス}非^レ之^ヲ。

〔墨子〕卷五・非攻上
（民衆がこれを聞いたら不正義だと思ふ）

五^ゴ谿^{ケイ}之^ノ蛮^ハ羞^{シラトシテ}二^ニ蜜^{ミツ}螂^{トシテ}一^ヲ而^{トス}珍^{トス}桂^{ケイ}蠹^{トス}。

〔郁離子〕卷下・天下貴大同
（五谿の異民族は小鼠や虫の蜜漬けをこちそうや珍味とする）

太子^{シトス}遲^レ之^ヲ。

〔史記〕刺客列伝・荊軻
（太子丹はそれ（荊軻の行動）を遅いと思った）

これらゴシック体で示した「甘しとす」「美とす」「非とす」「羞とす」「珍とす」「遅しとす」はすべて「異とす」と同じ用法です。教科書題材にあつて、しかも注釈のない語ですから、つまり生徒に学んでもらいたい語であるわけです。ということはそれぞれの字について、「異とす」と同じように読みと意味とを生徒に覚えさせるのでしょうか。すべてこの調子で教えていくとすれば、膨大な情報を単語学習という形で生徒に教え込むことになります。無駄とまでは言いませんが、あまりに非効率ではないでしょうか。そんなことをするより、これらがすべ

2. 意動用法

同一の用法であるとして、「しを…とす」の形だと教える方が、本質的で効率的でしょう。生徒だってそう思うはずです。そこでやはり漢文法の出番なのです。

名詞・形容詞Pが「PレO」の形で目的語Oを取ったと考えられる場合、Pが他動詞に活用して「OをPだと思う・見なす」ないし「OをPとして扱う・Pとする」という意味を表していると見なすルールがあります。これを「意動用法」と言います。

このとき訓読としては基本的に「名詞十とす」「形容詞終止形十とす（しとす）」「形容詞語幹十とす」の形で読みます。例1に挙げたたくさんの用例はみなこれに該当します。

ただし意動用法を表すのにふさわしい言葉が日本語の語彙に存在している場合、そちらを優先して読みます。「軽しとす」ではなく「軽んず」、「重しとす」ではなく「重んず」、「貴しと

「す」ではなく「貴ぶ」などがそれです。かつては「難しとす」も「難んず」と読んでいました。が、現在では廃れてしまったようです。

3. 於字句と意動用法

さてここで気をつけなければならないのが、「於」による前置詞句（以降、「於字句」）を使った互換表現です。

一般的に動詞の後ろに置かれた於字句は、「於」を置き字として「く」に「くより」と読んで、原則として「くを」と読むことがありますが、この目的語は直接目的語でない」ということを明示するために置かれるものであり、その性質からして「くを」と訓読されることがきわめてまれだからです。例えば「教於梨園」とあれば、「梨園を教ふ」と読むのではなく、「梨園に教ふ」と読みます。この「梨園」は直接目的語（教える内容）ではなく、ここでは場所目的語（教える場所）であることを、前置詞「於」が教えてくれているのです。

この点は漢文を読み込む上で重要な知識なので、先生方のなかには生徒にこれを明示し「於字句は（くを）と読まないのだ」と注意喚起している方も多いのではないのでしょうか。ではこの点を踏まえた上で、次の例文をご覧ください。

例2 A
整・像・冒・突・白刃、軽・身・守・信。

（劉整と鄭像は白刃を冒して突進し、我が身を軽んじて信義を守りました）
『三国志』魏書齊王紀

例2 B
大王萬乘之主、輕於不測之淵。

（孫權さまは大帝国の主でありながら計り知れぬ深淵を軽んじておられます）
吳志吳主伝裴注所引『江表伝』

この例からもわかるように、どちらの「軽」も「軽く見る・あなどる」の意味になりますから、訓読では「軽んず」と読むことになります。すると例2 Aの「軽」O「だけ」でなく例2 Bの「軽」於O「のほうも」Oを「軽んず」と読まざるを得なくなりませぬ。

これが「於字句を（くを）と読まねばならない例外」の一つである、「於字句による意動用法」なのです。意動用法の目的語は於字句と互換できるので、前置詞「於」の有無にかかわらず同じように読まなければなりません。

例3
則其求之也、曷嘗不貴於敏乎。

（ならば孔子が古の教えを追求するときに、どうして「敏」を尊ばないことがあったらうか）
黃潛『金華黃先生文集』敏字齋記

この一文は二〇一一年センター試験の第四問漢文で出題されたもので、返り点だけが付されたここに傍線がひかれ、正しい書き下し文を選ばせる問題が設けられました。ここで選択肢の一つに、「貴於敏」の部分で「敏を貴ぶ」と読むものがあつたので、「於字句は（くを）と読まない」という原則を信じた受験生の多くが、この選択肢を誤答として排除してしまいました。結局ご覧の通り「敏を貴ぶ」と読むのが正しかったわけですが、そのように読むことの文法的根拠は、「貴」が「貴し↓貴しとす||貴ぶ」の意動用法であり、「於字句による意動用法」が成立していることであつたのです。

4. 終わりに

最後の説明こそかなり難しくなつてしまいましたが、漢文法を用いての読解とは「品詞と活用を手がかりに、語順に注目して読む」ただそれだけです。漢字の並びにルールと意味があるからこそ、その解釈や訓読にも一定の原則や法則が生まれるのです。逆に言えば、返り点一つを取ってみても、そこには漢文法の原理原則が何かしら反映されているのであつて、単に語順を顛倒させているだけではないのです。

漢文法に詳しくなると、漢文指導が正確になり、また深みも生まれます。拙文が漢文法を学ぶきっかけとなれば幸いです。最後までお読みいただき、誠にありがとうございます。